

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース

(財) 第五福竜丸平和協会

〒136 東京都江東区夢の島3-2
都立・第五福竜丸展示館内
電話 (521) 8494

第五福竜丸の東二〇キロ

土井 庄一郎

いま、手もとに『原爆症』をひろげている。この本はいまから三十七年前に草野信男博士によって書かれたもので、広島、長崎の犠牲者の写真が数多く収められている。

この本を編集していたときのことを昨日のように思いだす。どの写真も惨をきわめたものだが、その中で私がとりわけ強い衝撃をうけたのは顔や手足にコブみみたいなものが無残に現われている写真である。

写真の説明文には左のように記されている。

「広島、被爆せずに爆発直後に中心地で働き、五年後に白血病で死亡した兵士。放射能が強く働いたと思われるところに白血性の結節が現れた。」と。

戦争があり、武器がつかわれる。武器とは敵の戦闘能力を破壊するものであるのに、一体この写真は何を物語っているのだ。

被爆地に救助作業におもむいた人が、

五年もあとになってから、発病して亡くなっていく。原子爆弾は武器とは呼べない。武器ではない。人間を滅ぼしてしまふ残酷な道具なのだ。しみじみ思った。この写真一枚だけとってみても、原爆はこの世にあってはならない、使うなどとはとんでもないことだということをも明白に訴えているのだ。

一人でも多くの人にこの本を見てもらいたい思いにかられて編集にはげんだ。

あれから三十七年たった。その間に、どんな愚行を東も西も重ねてきたことであろうか。

一九四六年(昭和二十一年)から一九五八年(昭和三十三年)までの間にマーシャル諸島のビキニ環礁とエニウエトク環礁で六回の水爆実験をふくめ実に六十六回の核実験をアメリカは繰りかえし行ったのだ。そのうちの一九五四年三月の水爆「ブラボー」の核実験で、第五福竜丸がビキニ環礁の東一六〇キロで操業中に死の灰をあびた。水爆「ブラボー」はTNT火薬に換算して、十五メガトン、広島に投下され

た原爆の一〇〇〇倍以上の威力だといわれている。

乗組員二十三名は懸命な治療をうけたが、この年九月、無線長だった久保山愛吉さんは亡くなられた。

第五福竜丸が死の灰をあびているとき、わずかに二〇キロ東にあるロンゲラップ島の住民もまた死の灰をあびていた。被曝した女性が死産・流産をくりかえし、被曝九年後には、発育・成長のおくれた被曝児があらわれ、島民がいままで見たことのない、病気で二十六名も亡くなり、続々と甲状腺異常者があらわれ、生れつき心臓や肺が悪い子どもがみられるにいたって、一九八五年、島民たちはついに故郷の島を捨てることをきめて、無人島メジャトへ移っていった。

故郷の島を捨てるを得なかったのだ。アメリカやヨーロッパの放射能の被害については、ことごとまやかに報道される。チェルノブイリは悲惨である。スリーマイルアイランドもひどい話である。ネバダの実験場の話もひどい。だが太平洋の諸島に暮している住民たちが核実験で何十人となぐ殺され、あげくの果ては、故郷を捨てるを得なかったという出来ごとが、それほどひろく話題になれないという事は、大きな悲劇的「差別」ではなからうか。(築地書館社長)

展示館の屋根高く舞ったたこ——たこあげ大会

成人の日の一月十五日、夢の島公園のグラウンドで「第十八回新春たこあげ大会」が協会主催、東京都後援でひらかれました。

地元江東区の小・中学生、教師父母をはじめ、千葉・神奈川の近県からも約百五十名が参加、広いグラウンドいっぱい思い思いのたこをあげ、原水爆の禁止と平和への願いを新たにしました。

江東区の小学校三年生の鈴木伸弘君は、友だちと手づくりのたこを持って参加。赤い八本足のたこ



第五福竜丸の下で表彰式

の絵をかいて「絵はうまいけれど骨をつけるのがむづかしかった」とたこあげに大奮闘でした。千葉県のコンピューター会社で働く野本道昭さんは、一カ月前かりで作ったという百五十枚余の色とりどりの連凧を展示館の屋根たかくあげて拍手かっさいでした。「第五福竜丸と共にたこをあげよう：夢の島から太平洋へ、そして世界へ第五福竜丸の願いを届けることしよう」(当日の表彰状)。近くの学童保育の「風の子クラブ」の子どもたち三十人もみんな自慢のたこを持ち、歓声をあげながらお母さんと一緒に走りまわりました。

展示館の中でおこなわれた表彰式では、優勝から三等賞まで賞状と賞品が協会の本多副会長の手から渡されました。今年も人工衛星から見た地球の大きな「地球儀」が一等賞。小学館、金の星社、童心社、草土文化、新日本出版社等から贈られた絵本や雑誌、ノート、労働教育センター、民商、毎日新聞労働組合から贈られたカレンダー、動物のぬいぐるみなどが参加

賞として渡されました。東京テレビ、少年少女新聞の取材もあり、夕方のニュースでも放送されました。

「ビキニの海は忘れない」ドキュメンタリー完成

ビキニ水爆実験被災船の調査をすすめる高知県の高校生の活動を追うドキュメント映画『ビキニの海は忘れない』が完成。三月一日高知で上映されることになりました。核の時代に生きる高校生の青春、という副題が新鮮です。

一月の末、監督の森康行さんとカメラマンが展示館を訪れ、第五福竜丸の姿をおさめたいと熱心に撮影されました。「黒潮と共に生き、非核の海を願う高校生たちがさわやかに青春を駆けぬける姿をえがく」と森さん。五月以降、東京で上映の予定とのことです。

協会92回理事会開く

一月三十一日、協会の第九十二回理事会が学士会館で開かれました。

①会務報告②三・一ビキニ事件記念集会③展示館の修理・拡充④当面の活動計画⑤職員の退職金等の議題について審議。昨年十二月に

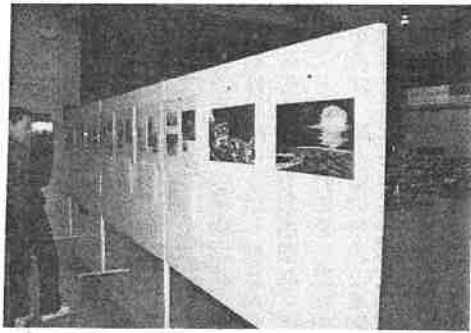
行なわれた展示替により、展示内容の充実がすすめられたことを評価し、さらに努力を払うこと、急務になった展示館の修理と拡充について対都交渉を強めていくことなどを決めました。三・一ビキニ事件記念集会の開催要綱(同封チラシ)、議事次第も決め、広く参加者をつのっていくことにしました。

次回理事会(三月二十六日)で審議する新年度の事業計画・予算の重点についても予備討議が行なわれました。

一九七九年以来、展示館の清掃を中心に勤務した高木サカイさんが退職。二月から地元江東区在住の星野輝代さんが勤務することが報告されました。職員の退職金規程も早急に作るとともに高木さんへの退職金についても決定しました。

都の「検査」おこなわれる

二月一日、東京都総務局行政部指導課による「法人の業務及び財産の状況に関する検査」が、三年ぶりにおこなわれました。議事録や各年度の事業報告・計画、予算・決算書など十数項目について、綿密な検査が二人の担当官によっておこなわれ、「良好」の指摘ともていくつつかの要請がだされました。



体育館いっぱいパネル展示

鯨の町太地は、あたたかな光の中、青い海と空に囲まれた自然の美しい町です。
二〇キロメートル南西に国道を走ると、第五福竜丸の造られた古座の町がありますが、ビキニで被ばくした第五福竜丸が古座の町で造られた事を知る人は少ないようです。

黒潮おどる海を見わたす教室で勉強している生徒たちも、三年生での東京方面への修学旅行に、第五福竜丸展示館を見学するための事前学習で、この事実初めて触れます。今年の三年生もビデオや資料を使って学習しました。

黒潮の町で絵本「わすれないで」原画展

佐藤 陽子

まず、玄関をはいると理科・釣り・家庭科クラブによる作品展示、体育館内では美術クラブ・書道・絵画・草木染めの展示、そして舞台を観る人の目にも見える位置に第五福竜丸の原画がパネル展示されました。
生徒たちは、「原画の美しさにびっくりした」「感動しました」という感嘆の声。

お母さん方の参加も多く、原画に熱心に見ている姿が印象的でした。きっと何かを感じとっていただけだと思っています。
生徒会新聞にも、「何かすごく好評でした。みなさんよく理解されたと思います。アア恐ろしい!! 展示がはなやいだ感じでした。あの版画は上手でした」とコメントを掲載してくれました。盛大に文化祭も終了したい、このような機会が持てましたことを喜ぶと同時に、より多くの方々に、このすばらしい第五福竜丸の原画を見ていただきたいという気持ちでいっぱいです。

NHK和歌山放送で、「流転・第五福竜丸」報道

(和歌山県太地中学校教諭)

本誌の昨年九月号に、NHK和歌山放送局の佐藤高彰さんが「時代を背負った船」として、第五福竜丸の特集番組が制作中であることを紹介された。その後関西地区で放送(九月)され、好評だったため、年末に再放送となった。そのビデオテープが最近展示館に寄贈された。

「不細工な船よりべっぴんさんの方が楽しめないかい」といっても船を造り続ける南藤藤夫さんのたくましい手と風雪を刻んだ風貌が印象深い。材木を切りだした海岸の近くに第五福竜丸のエンジンがいまも眠っていると聞き一升瓶を下げておむむき、海に酒を注ぐ姿に胸が熱くなる。

平和随想 ⑦

三宅 泰雄



中野好夫氏

まえにも書きましたが、いまの「第五福竜丸平和協会」の前身は「第五福竜丸保存委員会」でした。この会は美濃部都知事を中心としてできたもので、一九六九年に発足しました。発足当時の代表委員は、美濃部亮吉、中野好夫、畑中政春、松山義夫、森滝市郎、壬生照順、鈴木正久、および私の八人でした。

今年八十九歳の高齢におなりです。先生は京都大学哲学科のご出身で、広島に原爆が落とされた当時、広島高等師範で哲学を教えておられました。たまたま、学徒動員につきそわれていたとき、原爆に見舞われ、右眼を失明する重傷を負われました。ビキニ事件当時は、広島大学教授として率先して原水禁禁止運動に参加され、広島での第一回原水禁禁止世界大会を組織されました。その後は被爆者団体協議会理事長、原水禁禁止日本国民会議代表委員その他として、原水禁運動の代表的な指導者であることは、ご存知の通りです。先生の原水禁禁止運動の体験は『反核三十年』(日本評論社、一九七六年)に詳しく記されています。先生は心やさしい方で、お会いするたびに、逆に一後輩に過ぎぬ私を励まして下さいます。

「第五福竜丸保存委員会」の代表委員の一人であった中野好夫先生も、第五福竜丸の保存について、熱心な方でした。先生は一九〇三年のお生まれでしたが、八十二歳で亡くなりました。先生は一九二六年の東京大学英文文学科のご出身ですが、当時は就職難時代で、卒業後、中学や師範学校の教師をしておられました。ようやく十年

くらいたって、東京女高師の助教に、さらに、その翌年、東大英文文学科の助教に任ぜられました。その後一九四八年に教授に昇進されましたが、四九歳のとき、突然東大教授の職を放棄されました。そのとき「大学教授では飯が食えぬ」という有名なせりふが伝えられていますが、先生の本心は、東大の保守性と官僚主義に愛想をつかされたのだと思います。
大学をお止めになってからはしばらく「平和」という小雑誌の編集に携わったり、安保反対運動や沖繩問題にも関わっておられました。また一九五八年にできた「憲法問題研究会」の主要メンバーの一人でもありました。専門の文学にも力を注がれ、シェクスピアの研究のほか、蘆花徳富健二郎(三巻)に対し、第一回大仏次郎賞を授けられています。

「第五福竜丸保存委員会」における中野先生のお考えは、水爆で被災したこの船への認識とともに、原水禁禁止への意志を深めるよう世間に訴えることでした。また、この機会に一九六三年に決裂したわが国の原水禁禁止運動(原水禁と原水協)の再統一をうながすことでもありました。この委員会の活動のおかげで、第五福竜丸展示館が完成したことは喜ぶべきことでした。